

かがみやまこきょうのにしきえ

加賀見山旧錦絵

〔解説〕

天明二年（一七八二）江戸薩摩外記座初演。容楊黛（ようようたい）作。大名家のお家騒動を題材とした時代物です。「草履打」は実際に武家で起こった事件がもとになっています。

〔あらすじ〕

お家乗っ取りの一味、局の岩藤（いわふじ）らは、その陰謀を知ってしまった町人出身の中老尾上（おのえ）を執拗に苛めます。町人出身ゆえに武芸の嗜みはなかくうと、鶴ヶ岡八幡への代参の折に、岩藤は尾上に試合を仕掛けてます。岩藤の苛めは更に度を増し、汚れた草履で尾上を打ち据えますが、なんとかその場を堪え忍んだ尾上は、その草履を懐に館への帰路につきます。草履打ちの辱めから自害してしまう尾上ですが、尾上に仕える女中お初が敵を討ち、お家騒動も解決となります。

〔廊下の段〕尾上に仕える女中のお初は、鶴ヶ岡八幡で尾上が岩藤から辱めを受けたことを他の女中達から聞きます。そこへ岩藤が現れ、尾上憎さからお初をも苛めにかかりますが、ちょうどその時、お家転覆の首謀者弾正が岩藤のもとを訪れ、お初は岩藤から解放されます。そして、お初は廊下で二人の策略を聞いてしまいます。

廊下の段

急ぎ行く。

星月夜、鎌倉山に風誘ふ、おうぎがやっ扇ヶ谷に棟高き、さき前の

管領足利家の思ひ人花の方の御館、咲きつゞきたる
花の御所、盛ります見の奥御殿、色香争ふ長局、武家
とはいへどなまめかし。

主の噂も鳥影も日脚ものびる八ツ下り、お下りの
お迎へとお初がそれと気も浮かぬ小腰かゞめて

「ヲ、コレハ、皆打寄つてお陸まじい、面白そ
うなお咄し、新参の私故、その仲間へは入れまい、後
程お目に」

と云捨て、御殿をさして行く所を

「ア、コレ、お初殿。そなたもこちらが仲間内、
マア、爰へ」

と呼びかけられ、嫌ともいはれず惣々の、中へ座れ
ば、さしでのお仲

「これお初殿、昨日鶴ヶ岡のこと聞いてか」

「イエ、わたしは何んにも存じませぬ」

「そんならマア聞きや、お局様と尾上様と御同道で
御代参においでなされた所、例のわんざんが出たか
して、あらうことかはしたくない、御用先で悪口たら

ぐ、まだその上に大それた、お中老もお勤めなさる
そなたの御主人尾上様のおぐしを、主の草履で叩い
たといのふ。堪忍づよい尾上様、御代参なりお上の
名代、ちつところへて其場は済んでしまふたげなが、
ナント思やる、かけ構ひのないこちとら迄、腹が立
つて、夕べは癩しやくが差込んで、お夜食をたべなんだ」
と苦は色かえる松風の評判者ぢやと口々にそしる折
から奥の間より立出るは顔も心もすぐならぬ、曲り

くねった局岩藤、あたり見廻し／＼て、

「ヤイ／＼女共、やかましい、そりや何をいふ、次へ
行け、行かぬか、立たぬか」

と呵しかられながら女子共、我が部屋々々へ立つて行く。

「ア、コリヤ／＼初、我にはちつと用がある。爰へ
こい／＼、怖い事はないはいのふ。来いといはどマ、
おぢやいのふ、アノそなたは女子共を集め一はな立
て何で人の噂をいふぞ、サアなぜ自らが事を悪ふい
やつた、何ぞ意恨でも有つてか、但し又尾上殿が悪
ふいへと言ひ付けたか、サアもちつと爰へおぢやい
のう、どうぞや、ヤ、サどうぞやいのふ」

と猫なで声も気味悪く、お初は漸う傍へ寄り

「イヤ私はたつた今参じまして何にも申す間はごご
りませぬ、お赦しなされて下されませ」

と行かんとするを小腕こがいな取り

「モウ／＼それで知れた、奥聞ふより口聞けと悪ふ
吐ぬかさぬものを何赦す事がある、アノ悪根性の尾上

づら、主が主ならおのれまで悪工わるたくみしさうな死人

女郎めろうめ、仏性なこのわしを、よふもよふもない事迄

拵こしらへてなぜ言ひやがった引さかれめドウド、どれ

面を見せいホ、ハ、ヲ、よい面ぢやなテモマアよい

器量ぢやな」

と傍若無人に引寄せて、詰めつ叩いつ打擲に、おろ

／＼涙お初が思ひ

「誤りました」

も出でばこそ只伏沈む斗りなり。

「お使者の御入り」

「エ、うぬは仕合せ者、只置くやつではなけれども、

よい時のお使者故ゆるしてくる。立って失せい」

と怒りの立蹴、口惜し涙押隠し、しほ／＼として立

つて行く。程も有らせず長廊下、のつかくくと権柄けんべい

眼、出向ふ岩藤、互にそれと表向き、相口馬の会釈まなこ

ほれく

「ヲ、お使者と有るを、どなたかと思へば弾正様、

御苦勞様や」

と互の目使ひしたり顔に上座じょうざに直り

「其以来は打絶へ申した、お使者の趣き余の儀なら

ず、持氏卿御病気なりと世上へ披露し御賢息二方の

うち、惣領たる花若殿は花の方の出生成れば御家督

との御内意、申入よと後室の御口上、かくの通り」

と述べにけり。

「ム、すりや御家督は花若様、是までいろくくと心

をつくせしは仇事かホイ」

「テサテ何の案じる事はない、肝心かんもうのコレ

この継目の綸旨、我らが方に隠し置けば花若の家督

相続思ひもよらず。シテ兼ての首尾はいかゞでござ
る」

「サレバ其事、大切なアノ密書いつぞや問註所もんじゆしょで取

落しハツと思ふていろく」と捜しても見へぬ密書、

尾上めが拾ふたとは鏡にかけてにらんで置いた。ス

リヤ尾上めをその分に済ましては寢覺心がとんと済

まぬ、昨日鶴ヶ岡へ御代参、尾上めを同道、よい折か

らと思ふた故、立つ居つにいち悪うどう喧嘩仕かけ

ても上手遣ふて相手にならず、慮外有つては身の落

度とモ流す程にく、煮ても焼ても喰はるる様な大

体利発な女めではないわいの。詮方尽きて人柄くづ

し、わしがはいた草履を持って尾上めを打つてく

打ちすへ、手向ひさせふと思ふた所マア聞いて下さ

れ、ヤモ恐ろしい奴、それをも辛抱しくさつて手持

ぶさたにその場を仕廻しもうた。時に尾上めが婢はしたに初とい

ふやつ、又こいつめに手向ひさせ、それから尾上めに付込まふと思ふて今も今とて散々にいちめかけたが、こいつも又辛抱づよい賢いやつ、手向ひ所か誤つてばかり居をつて是も又つぼへは行かぬ。此分ならば中々あいつも遠ざける事は成るまい、兼てこちらが巧みの様子けどっているアノ尾上め、思案がかりたい弾正様」

「ム、テ扱しぶとい女め、じき／＼の謀はかりごとに乗せらるゝ女ならず。ハテどふがな」

と思案の内、襖の影に婢のお初、様子窺ひためらふともしらぬ岩藤せゝら笑ひ

「ホ、ホ、あの仰山な弾正様。此家を一呑にと企てるお前やわしが、アノ女郎一疋が何でそれ程恐ろしいぞ、アリヤ堪忍強いのでも有るまい、真実生れ付いた憶病者。又これからは模様をかへ、あいつを

追出す其思案はお案じなされますな、これ爰にござります／＼わいな」

「ム、しからば能よきにはからはれよ。きやつめ一人ぼいまくれば」

「ヲ、後は野々宮アノ妻づらは心よし、大殿は死んで仕廻ふ、若殿の小びつちよ殿にあてがいぶちを喰はせて置けば此一家中はお前とわしが」

「アコレ、シイ、岩がものいふ世の譬たとえ、互の胸はナ、イヤナニ岩藤殿、吉左右を相待ち申す」

と浮べる雲の空頼み、奥と部屋とへ時宜式礼別れて
(こそは入りにけり)

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。

予めご了承下さい。